

# 鶴山書院報

第8号

公益財団法人  
孔子の里

〒846-0031  
佐賀県多久市多久町  
1843番地3 東原庁舎内  
TEL 0952-75-5112  
FAX 0952-75-5320

E-mail ko-si@po.taku.ne.jp  
URL <http://www.ko-sinosato.com>

発行人  
理事長 横尾 俊彦

## 安岡正篤先生と多久

「丹邱」に込める理想探求



公益財団法人孔子の里  
理事長(多久市長) 横尾 俊彦

丹邱。「たんきゅう」と読みます。その意味するところは、仙人の住む理想郷といわれます。

多久の別称とも伝わるこの言葉を冠した扁額「丹邱学苑」が市長応接室にあります。筆を執られた揮毫の主は碩学・安岡正篤先生です。歴代総理大臣の施政方針演説にも朱筆を加えた人物としても知られ、平成の始まりには元号決定にも関わりがあったとも伝わっています。

### 先人の志・理想の探究

なんと安岡先生が多久に来訪され「丹邱学苑」の墨筆を遺されていたのです。どうやら安岡先生は当時の多久中学校初代校長、西河堂大樹(林盛達)先生を訪ねられたようです。

西河堂先生による『進徳修業』ある教授の志』には、多久と丹邱のことが記されています。

「多久は景勝の地でもあったから、多くの詩人や文人がいて、土地の雅名として多久を『丹邱』と呼んだ」とあります。丹邱とはもともと丹丘と書き、仙人の住むところで、昼夜光り輝き、万事明朗で理想的な国である仙境という意です。そこで、多

久では、孔子の名「丘」の字をそのまま使用することを控え、「丹邱」と書いたのです。そこはかとなき謙虚さがにじみます。さらに同書は、「万人周知の如く、子弟の教育如何によつて、一家は興廢し、一郷は隆衰し、一國は盛衰する」という至言も伝えていきます。

そのような深い視座から、西河堂先生は、「丹邱」をめざす志のもと、「丹邱学苑」という地域社会学校を昭和22年より7年間、実践されたようです。それはまさに校長在任期間と一致しています。

西河堂先生は大正14年に安岡先生門下に入門されており、おそらく安岡先生は門下生の激励に超越しになったのだろうと拝察できます。

「丹邱学苑要項」に「学道の目標」があります。「自他の自覚を促し、人間としての今日を高める。現代に生きる道を学び、社会生活の向上をはかる。国および世界に対する理解を深め、地域社会の改善につとめる。芸術や道徳を解する心境を拓き、不良防止の徹底を期する。善隣・協調・奉仕の習慣を養い、世界の平和と人類の福祉に寄与する」と記されています。いずれも現代に通じます。

ここには「一隅を照らす」生き方を見る思いがします。戦後への峠で尽力した白洲次郎が理想の生きざまとした「カントリー・ジェントルマン」につながります。私たちもお互いに、未来のためにあくなき研鑽を積まれた先人を範とし、人としての高みをめざして努めたいものです。

### 安岡活学の見方・考え方

安岡正篤先生は、東洋哲学、別けても日本を日

本たらしめる精神や歴史の解明、中国や日本の古典などに明るく、その碩学ぶりは多くの著作に垣間見ることが出来ます。

迷うとき悩むときにはその著書の一端に触れられることをお勧めできます。実に簡にして明なる助言の花束に出会うことができます。

さて、今や世の中の話題やニュースは、新型コロナウイルス感染症問題で満載状況です。国内も4月の緊急事態宣言と自粛要請、全国に広がった感染予防啓発などありますし、一旦は効果があつたように思えた感染者数減少もあり、それは改善にも映りましたが、その後再び感染者数が増加し、なかなか鎮静化しそうにありません。東京の1日あたり感染者数が1000人を切ると少し安堵というのも率直な反応。全国的感染者増加が気になります。まさに容易ならざる、の思いは絶えません。

容易でないといえは人生は問題が付きもの。回避できればそれにこしたことはありませんが、そうはいかないのも人生。ではどうすべきか。逃げるわけにはいかないなら、立ち向かうしかありません。積極的に挑むのです。意を決し事に臨めば活路は開けると信じて進む。真剣に臨めば道は見えます。だから、難事に出逢つても、困りきれず、「ありがとう」の姿勢で受け止める。「えっ、困難を喜び受け入れるのですか?」。ここが肝心要です。

安岡先生は、事を考える際に「長期的、本質的、多角的に考える」が肝要と説かれています。目先に惑わされず、上辺だけを見ず、狭い視野に陥らず、しっかり熟慮せよの教えます。肝に銘じたい教訓です。いまの混迷の時代に通じるからです。

### 秋も略祭で挙行します

秋季積業は、新型コロナウイルス感染症の影響のため略祭で行います。コロナ禍が早期に克服できるよう念じるとともに、新天地創造の意欲をもって日々努めて参りたいと思います。(8月25日記)

# 多久出身の藩医・西岡春益と佐賀の漢学者集団(四)

佐賀大学 教授 中尾友香梨

前回まで、春益の父長圓、春益の生卒年、別号、藩医としての活躍、藩主治茂からの篤い信頼、古賀精里や横尾紫洋との交流などについて述べてきた。連載最終回となる今回は、春益の子孫たちについてふれよう。

も診療のため呼び出されたことが記されている。  
○同年八月下旬記事

「迎亨純・花房三立・西岡長垣・相良柳庵」が、藩主治茂の診療にあたったときの記録が掲げられている。

## 一、藩医西岡長垣

まず、『泰医院様御年譜地取』（『佐賀県近世史料』第一編第五卷〜第十卷）より、春益の子に関する記事拾ってみよう。

○天明元年（一七八一）九月十八日記事

医学・武芸の稽古のため他国に遊学している者

五名の名が掲げられており、その一人が「春

益悻」西岡長垣」と記されている。

○同六年（一七八六）二月十六日記事

「医術取立心遣頭取」に「西岡春益」、「医術取立小師範」に「西岡長垣」の名が掲げられている。

○文化元年（一八〇四）七月二十日記事

藩主治茂の発病に際して、「御療養方申談、福地意庵・津田松園・久保魯庵・西岡栢庵〔長垣親隠居〕被仰付之」と、隠居中の春益（栢庵）

これらの記事からわかるように、春益(号は栢庵)

の子は長垣と称しており、医学稽古のため他国に遊

学し、帰藩して春益の跡を継いで藩医となった。ち

なみに文化二年（一八〇五）の『惣着到部類』（佐賀

県立図書館蔵）には、すでに「切（米）百三十石

鍋島主税組 西岡長垣」と、佐賀藩士としての長垣

の名が掲げられている。

古賀精里が春益の古稀を祝って書いた「賀栢菴西

岡国手七十序」（『精里全書』巻十二）には次のよう

にある。

令嗣長垣、技の媲美たるを以て侯の侍医と為る。

令孫周慎も、亦た嶮然として頭角を露す。其他の

の懿親盛族も、蟄蟄林林として、一藩に罕儔たり。

客冬、長垣、五馬に従いて来たり。今將に帰りに

懸弧の寿觴を献せんとするなり。余に造りて言を

乞う。（原漢文）

「令嗣」と「令孫」はそれぞれ他人の跡継ぎと孫を敬つていう語。「媲美」は比肩する、匹敵する意。

ここでは長垣の医術が父春益に比肩するほど優れていることを褒めていう。「嶮然」は高く抜きん出ているさま。「懿親」とはもともと皇室の親族や外戚

を指す言葉であるが、ここでは身分の高い親族の意で使われている。「盛族」もこれと類似する意味で、盛大な家筋、権門の家柄を指す。「蟄蟄」は多いさま、

また和らぎ集まるさま。「林林」は多く集まるさま、群がるさま。「罕儔」は「儔儔なり」で、世に珍しいさま。「客冬」は昨年。「五馬」は太守の異称、古代中国の太守の車には四頭の馬のほかに副え馬を一頭つけていたことからいう。ここでは藩主を指す。

「懸弧」は男子の誕生日、古に男の子が生まれると桑の弧（弓）を門の左に懸けて前途を祝ったことからいう。また一説には、桑の弓と蓬の矢で天地四方

を射て其の功績を立てんことを祝したからともいう。「寿觴」は長寿を祝う觴（杯）。

序文の日付は「文化新元花朝」（文化元年「一八〇四」二月）となっている。精里は寛政八年（一七九六）にはすでに幕府の招聘を受けて江戸に出ているので、この序文は江戸で書いている。序文の内容から読み取れるのは、長垣が前年冬に藩主の参府に

従って江戸に来ていること、つまりその時点ですでに藩主の侍医に抜擢されていたこと、そしてこの春

にまもなく帰国することになるが、その前に父の古稀祝いの準備の一つとして、春益の旧友である精里

を訪ね、寿巻の序文を依頼したことなどである。

なお、春益の孫・周禎にも言及し、彼も頭角を現している。記すが、これについては後ほどもう少し詳しく述べることにしよう。

精里は続いて、十年前、佐賀で春益をはじめとする漢学者たちと詩社を結成し、定期的に集いを催して楽しんだ思い出を懐かしげに綴るが、具体的な内容については前回すでに紹介したので、ここではくり返さない。

## 二、文人岡元泰

同じく多久出身の医者で、安永六年（一七七七）に佐賀藩江戸藩邸の奥医師として召し抱えられた、徳永雨卿の六十歳生日を祝う宴が、翌年江戸で催された。このとき友人・知人たちから寄せられた記念の詩文・和歌が、雨卿の七十歳、七十四歳の時のそれと一緒に、一巻の巻物に仕立てられ、現在佐賀大学地域学歴史文化研究センターに蔵されている。

この寿巻に「岡元泰」という人物による一幅の書が含まれており、漢文で次のように記してある。

〔紙張一〕  
戊戌秋八月六日は、桐岡源先生の耳順の仙誕たり。越に群賢、雲のごとく雑まり、琴瑟堂に在り、各おの詩賦を陳べ、以て眉寿を称う。余や、

先生と同郷なり。而して余の東都に遊ぶや、其の通家の子なるを以て、視ること猶お子のごとし。

幸いに仙筵の後に陪するを得て、斯の盛事に遭遇す。固陋にして、宮商の音に与ること能わずと雖

も、恭みて巴歌三章を賦して、聊か鄙誠を寓すと云う。（原漢文）

西肥後学 岡元泰 再拜

〔洪鏞隨鼓〕（陽刻円印）

〔岡元泰印〕（陰刻方印）

〔余字大来〕（陽刻方印）

「桐岡源先生」とは徳永雨卿のこと。多久桐岡の出身で、嵯峨天皇の末裔ということからいう。「耳順」は六十歳。「琴瑟」は琴と瑟の音が調和する意、ここでは朋友が親しみ合うことをいう。「眉寿」は長

寿の人。長寿の人は眉に長毛が生えるということからいう。「通家」は先祖の代より親しくつきあっている家。「仙筵」は仙人の宴、ここでは雨卿生日の祝宴を敬つていう。「後」は末。「宮商」は音楽の基

本となる宮・商の二音、転じて音律。「巴歌」は田舎の卑しい歌、転じて自らの詩歌を謙遜していう。

「鄙誠」は自分の真心をへりくだつていう語。

一連の記述から窺えるのは、岡元泰が雨卿と同じ

く多久の出身であり、当時江戸に遊学していたが、

雨卿とは先祖の代より親しくつきあっている家同士の者という間柄から、まるで実子のようによく面倒

を見てもらったということである。

そして興味深いのは、落款印である。まず最後の

陽刻方印より、元泰は字を「大来」としていたことがわかる。そして最初の「洪鏞隨鼓」（図一）は、「洪鏞隨鼓」のことであり、「洪鏞（大鐘）の鳴り響く音は、鐘を敲（撃）つ力に随う」という意味を表す。この

ように自らの座右の銘、または好きな言葉、宗教的な語句、風流な言葉などを彫り込んだ印章のことを、「遊印」または「詞句印」「成語印」などと称する。文人たちが自らの書画作品に捺することが多い。

ちなみに「洪鏞隨鼓」という印文は、空海の「大唐神都青龍寺故三朝国師灌頂阿闍梨惠果和尚之碑」（「性靈集」巻二）に見える「洪鏞之響、随機卷舒」（洪鏞の響き、機に随って巻舒す）という句と、主旨が一致するわけではないが、表現はこれからヒントを得た可能性がある。

そしてこの印文は、実は本連載の初回で紹介した、佐賀の名物、野中烏犀圓の製造と専売にかかる寛政八年（一七九六）三月付けの許可書に捺された藩医・西岡春益の印（図二）と同じものである。公的文書に遊印が押されていることに首をかしげたくなるのも事実だが、それはさておき、同じ印鑑を使用していることから、筆者は

はじめ岡元泰と西岡春益を同一人物と考えていた。

はじめ岡元泰と西岡春益を同一人物と



▲図1 西岡元泰印



▲図2 西岡春益印

しかしその後、より多くの資料にあたるにつれて、春益の子・長垣こそ元泰と同一人物であることが判明した。元泰(長垣)と父春益の使用した印鑑が同一のものであったのか、それとも同じ印文を彫った別々のものであったのかは判じ難いが、もし前者であれば、元泰(長垣)は自ら彫った遊印(自作する場合が多い)を父春益に所望されて譲った可能性がある。そして春益はこの印章を仕事でも使うほど愛用したのであろう。いずれにしても二人が文人趣味を解する父子であったことは間違いない。

元泰が江戸で医学の修業を行っていた頃、当地にはもう一人遊学に来ている多久出身の人物がいた。石井鶴山である。同郷の二人は親しく交わった。『鶴山遺稿』には「同和岡元泰」「落花和岡大来」の二首

が収められており、題からもわかるように、いずれも元泰の詩に唱和したものである。「同和岡元泰」には「不嫌陋巷此留鞍、酒満匏樽客倚欄」(陋巷を嫌わず 此に鞍を留め、酒 匏樽に満ちて 客 欄に倚る)、「停雲徐榻須同臥」(停雲 徐榻 須らく同に臥すべし)などの詩句が見えるので、元泰は友人鶴山の居所を訪ねて夜遅くまで共に飲み、宿を借りることもあったようだ。「停雲」「徐榻」はいずれも友情の縁語である。

さて、現小城市清水の滝の瀉壺の横には、「倉永節士清雄之碑」が建って



▶図3 倉永節士清雄之碑

いる(図3)。元文五年(一七四〇)、第六代藩主・鍋島宗教の大病平癒を祈って数日間断食した後、大雪の中で清水の滝に打たれて凍死した藩士・倉永清雄の記念碑である。碑背の文は経年劣化によりほとんど判読できないが、文を撰したのは石井鶴山であり、書は西岡元泰の手になる。碑表に刻まれた元泰の力強い書が印象的である。

また、佐賀藩内の文化的流行と歴史を記録した『雨中の伽』(堤主禮著、文化九年「一八一二」)は、「茶道」史を記す中で、「当御側江戸登の人は、西岡長垣をはじめ、雨雪庵門人多し」と、元泰(長垣)が宗徧流の茶道を修めたことにもふれている。

三、春益の孫・周禎  
文化元年(一八〇四)に春益の古稀祝いが佐賀で盛大に催された。このとき編まれた記念詩文集の写し(『西岡栢庵古稀寿』)が、国立国会図書館に蔵されている。

巻頭を飾るのは長男岡元泰によるお祝いの詩である。本稿第一節で見たように、元泰(長垣)は古賀精里にこの詩文集の序文を求めたが、なぜかこの写しにはそれが収められていない。そして圧倒的な存在感を放つのは、春益の孫周禎である。当時、周禎は熊本の高本紫溟(一七三八〜一八一四、藩校時習館第三代教授、医者)の門に学んでいた。祖父の古稀祝いのため帰国することになるが、これに際して師の紫溟をはじめ訓導・学友らに、記念の詩文や和歌を求めたのである。その結果、『西岡栢庵古稀寿』には肥前の文人だけでなく、肥後の文人の作品も多く収められることになり、記念詩文集の収録作品の幅を大いに広げた。

師の紫溟の詩題に、「佐賀府西岡敏卿、遊学余門、甲子首夏、将帰侍其祖栢庵翁七十慶之宴、因賦送之、兼代寿詞」(佐賀府の西岡敏卿、余が門に遊学す。甲子首夏(文化元年四月)、将に帰りて其の祖、栢庵翁の七十の慶の宴に侍らんとす。因りて賦して之れを送り、兼ねて寿詞に代う)とあり、また起聯には「三春誦罷促婦装、路指栄城是故郷」(三春 誦し罷りて婦装(婦り支度)を促す、路は栄城(佐賀)を指す是れ故郷)とあることから、周禎は熊本に遊学して



三ヶ月を経たと見られる。「敏卿」は師の紫溟から与えられた字である。『紫溟先生遺稿』巻五に「西岡生名字説」が収められている。

さて、嘉永四年（一八五二）の『分限着到』には再び「西岡春益」の名が登場しており、同年の『免札医業姓名簿』にも「西岡春益」が内科の医業免札（医師開業免許）を与えられたことが記されている。なお、安政三（五年）（一八五六）の藩士名簿『早引』には、「西岡春益 四十二歳」周碩 二十四歳」とあるので、この二代目春益は周禎の子、長垣の孫、初代春益の曾孫であろう。

そして、二代目春益の子が西岡逾明（天保八年「一八三七」生）であり、右記の周碩と同一人物である。周碩ははじめ先祖代々の家督を継いで医者道を歩むが、のちに明治政府の司法官となる。その生涯については、直江博子「西岡逾明―ある文人司法官の生涯」（『小田原史談』第二二二号）第二二八号連載）が備わる。

以上、四回にわたって、多久出身の藩医・西岡春益とその子孫について、現段階でわかる範囲で記した。これまでほとんど歴史に埋もれていた人物たちであり、まだ解明できていない部分も多く残されている。今後さらに掘り下げて調べる必要がある。

最後に、本連載の機会を与えてくださった本誌と読者の皆さまに、心より御礼を申し上げます。

西岡春益―長垣（元泰）

―周禎―二代目春益―逾明

◆ 賛助会員入会の案内 ◆

本法人では、重要文化財多久聖廟及びその周辺に所在する史跡等の保全とすぐれた自然条件との調和のとれた開発を推進し、快適な環境の醸成と、由緒ある文教の地に適応した学芸文化の研鑽振興及び普及を図り、もって地域の活力ある発展に寄与することを目的として活動をしています。  
ご賛同いただき、ご入会ご協力をお願い致します。

● 会員の種類

個人賛助会員 年会費 一口 3,000円  
法人賛助会員 年会費 一口 10,000円

● 入会申込み・お問い合わせ

〒846-0031 多久市多久町1843番地3 東原庫舎内 公益財団法人孔子の里 事務局  
電話 0952-75-5112 FAX 0952-75-5320  
E-mail ko-si@po.taku.ne.jp

詳細は当財団ホームページをご覧ください。

孔子の里 検索

2020年 賛助会員名簿

団体（法人）会員

株式会社音成印刷 佐賀県小城市  
株式会社佐賀銀行多久支店 佐賀県多久市  
脇町漢詩教室 徳島県美馬市

個人会員

田沼 裕樹	千葉県松戸市	荒谷 薫	多久市南多久町	若林 浩	兵庫県宝塚市
谷村 正俊	福岡県那珂川市	井浦 敏彦	福岡県福岡市	吉永 学弘	大阪府交野市
谷 知子	福岡県福岡市	猪狩 立雄	埼玉県所沢市	山本 武雄	大阪府堺市
田中 英億	兵庫県明石市	磯田 信	兵庫県三木市	八代 正輝	宮崎県宮崎市
武田 昌孝	山形県山形市	諫山 匡矩	佐賀県小城市	森 四朗	佐賀県嬉野市
高橋 信敏	北海道網走市	泉田辰二郎	熊本県熊本市	桃井 光子	大阪府大阪市
高島美津子	佐賀県鳥栖市	板本 健作	神奈川県藤沢市	桃井 幸子	神奈川県横浜市
副島 陽子	佐賀県佐賀市	伊藤あけみ	福岡県福津市	室橋 幸子	神奈川県横浜市
住田 篤雄	神奈川県川崎市	岩永 幸太	佐賀県鹿島市	村上 健夫	佐賀県伊万里市
陣内佐由里	多久市多久町	上田 尤子	神奈川県横浜市	三ツ橋文子	群馬県桐生市
陣内 清春	多久市多久町	大坪正一郎	多久市南多久町	村田 隆弘	兵庫県姫路市
篠崎 義道	福岡県北九州市	大森 一廣	福岡県福津市	堀 哲	神奈川県横浜市
小路 清美	多久市南多久町	小倉 誠	埼玉県南埼玉郡	祝 健一郎	新潟県新潟市
小林 順子	大阪府寝屋川市	鹿江 寛二	多久市多久町	古田 光子	神奈川県川崎市
小林 迪雄	神奈川県横浜市	亀川 将平	佐賀県佐賀市	古田 茂	愛知県弥富市
古賀千恵子	佐賀県佐賀市	北島 一明	多久市南多久町	藤田 修	兵庫県加古川市
北島 繁安	多久市南多久町	北島 繁安	多久市南多久町	藤田 次郎	神奈川県横須賀市
小林 順子	大阪府寝屋川市	北島 一明	多久市南多久町	藤川俊二郎	長崎県佐世保市
小林 迪雄	神奈川県横浜市	北島 繁安	多久市南多久町	藤田 修	兵庫県加古川市
古賀千恵子	佐賀県佐賀市	古賀千恵子	佐賀県佐賀市	古田 茂	愛知県弥富市
小林 順子	大阪府寝屋川市	小林 順子	大阪府寝屋川市	古田 光子	神奈川県川崎市
小林 迪雄	神奈川県横浜市	小林 迪雄	神奈川県横浜市	古田 茂	愛知県弥富市
古賀千恵子	佐賀県佐賀市	古賀千恵子	佐賀県佐賀市	古田 茂	愛知県弥富市
北島 繁安	多久市南多久町	北島 繁安	多久市南多久町	古田 茂	愛知県弥富市
北島 一明	多久市南多久町	北島 一明	多久市南多久町	古田 茂	愛知県弥富市
亀川 将平	佐賀県佐賀市	亀川 将平	佐賀県佐賀市	古田 茂	愛知県弥富市
鹿江 寛二	多久市多久町	鹿江 寛二	多久市多久町	古田 茂	愛知県弥富市
小倉 誠	埼玉県南埼玉郡	小倉 誠	埼玉県南埼玉郡	古田 茂	愛知県弥富市
大森 一廣	福岡県福津市	大森 一廣	福岡県福津市	古田 茂	愛知県弥富市
大坪正一郎	多久市南多久町	大坪正一郎	多久市南多久町	古田 茂	愛知県弥富市
上田 尤子	神奈川県横浜市	上田 尤子	神奈川県横浜市	古田 茂	愛知県弥富市
岩永 幸太	佐賀県鹿島市	岩永 幸太	佐賀県鹿島市	古田 茂	愛知県弥富市
伊藤あけみ	福岡県福津市	伊藤あけみ	福岡県福津市	古田 茂	愛知県弥富市
板本 健作	神奈川県藤沢市	板本 健作	神奈川県藤沢市	古田 茂	愛知県弥富市
泉田辰二郎	熊本県熊本市	泉田辰二郎	熊本県熊本市	古田 茂	愛知県弥富市
諫山 匡矩	佐賀県小城市	諫山 匡矩	佐賀県小城市	古田 茂	愛知県弥富市
磯田 信	兵庫県三木市	磯田 信	兵庫県三木市	古田 茂	愛知県弥富市
猪狩 立雄	埼玉県所沢市	猪狩 立雄	埼玉県所沢市	古田 茂	愛知県弥富市
井浦 敏彦	福岡県福岡市	井浦 敏彦	福岡県福岡市	古田 茂	愛知県弥富市
荒谷 薫	多久市南多久町	荒谷 薫	多久市南多久町	古田 茂	愛知県弥富市
土川 泰信	東京都江東区	土川 泰信	東京都江東区	古田 茂	愛知県弥富市
津村 裕史	大阪府高槻市	津村 裕史	大阪府高槻市	古田 茂	愛知県弥富市
寺田 準	長野県長野市	寺田 準	長野県長野市	古田 茂	愛知県弥富市
長尾 鈴江	愛媛県松山市	長尾 鈴江	愛媛県松山市	古田 茂	愛知県弥富市
長岡 巨知	神奈川県大和市	長岡 巨知	神奈川県大和市	古田 茂	愛知県弥富市
中山 正道	東京都品川区	中山 正道	東京都品川区	古田 茂	愛知県弥富市
西山 秀利	多市市南多久町	西山 秀利	多市市南多久町	古田 茂	愛知県弥富市
野口 康子	福岡県福岡市	野口 康子	福岡県福岡市	古田 茂	愛知県弥富市
服部 政昭	多久市南多久町	服部 政昭	多久市南多久町	古田 茂	愛知県弥富市
馬場 守一	熊本県合志市	馬場 守一	熊本県合志市	古田 茂	愛知県弥富市
半田 国子	愛媛県松山市	半田 国子	愛媛県松山市	古田 茂	愛知県弥富市
日野 寛	福岡県大野城市	日野 寛	福岡県大野城市	古田 茂	愛知県弥富市
平今 正道	福岡県福岡市	平今 正道	福岡県福岡市	古田 茂	愛知県弥富市
藤井 次郎	神奈川県横須賀市	藤井 次郎	神奈川県横須賀市	古田 茂	愛知県弥富市
藤川俊二郎	長崎県佐世保市	藤川俊二郎	長崎県佐世保市	古田 茂	愛知県弥富市
藤田 修	兵庫県加古川市	藤田 修	兵庫県加古川市	古田 茂	愛知県弥富市
古田 茂	愛知県弥富市	古田 茂	愛知県弥富市	古田 茂	愛知県弥富市
古田 光子	神奈川県川崎市	古田 光子	神奈川県川崎市	古田 茂	愛知県弥富市
祝 健一郎	新潟県新潟市	祝 健一郎	新潟県新潟市	古田 茂	愛知県弥富市
堀 哲	神奈川県横浜市	堀 哲	神奈川県横浜市	古田 茂	愛知県弥富市
前田 隆弘	兵庫県姫路市	前田 隆弘	兵庫県姫路市	古田 茂	愛知県弥富市
松本 繁	多久市多久町	松本 繁	多久市多久町	古田 茂	愛知県弥富市
三ツ橋文子	群馬県桐生市	三ツ橋文子	群馬県桐生市	古田 茂	愛知県弥富市
村上 健夫	佐賀県伊万里市	村上 健夫	佐賀県伊万里市	古田 茂	愛知県弥富市
村上 春美	福岡県飯塚市	村上 春美	福岡県飯塚市	古田 茂	愛知県弥富市
室橋 幸子	神奈川県横浜市	室橋 幸子	神奈川県横浜市	古田 茂	愛知県弥富市
桃井 幸子	神奈川県横浜市	桃井 幸子	神奈川県横浜市	古田 茂	愛知県弥富市
桃井 光子	大阪府大阪市	桃井 光子	大阪府大阪市	古田 茂	愛知県弥富市
桃井 幸子	神奈川県横浜市	桃井 幸子	神奈川県横浜市	古田 茂	愛知県弥富市
森 四朗	佐賀県嬉野市	森 四朗	佐賀県嬉野市	古田 茂	愛知県弥富市
八代 正輝	宮崎県宮崎市	八代 正輝	宮崎県宮崎市	古田 茂	愛知県弥富市
山本 武雄	大阪府堺市	山本 武雄	大阪府堺市	古田 茂	愛知県弥富市
吉永 学弘	大阪府交野市	吉永 学弘	大阪府交野市	古田 茂	愛知県弥富市
若林 浩	兵庫県宝塚市	若林 浩	兵庫県宝塚市	古田 茂	愛知県弥富市

『珮川詩鈔』版本と版本が物語るもの 第2回  
公益財団法人 孔子の里 評議員

多久市郷土資料館長 藤井伸幸

※今回は木版印刷の概要や『珮川詩鈔』版本の概要について述べました。今回から版本を具体的に見ます。

※この稿では木版本(版本)に対応する語句として「版本」を使いますが、「板木」とも書きます。

(一) 表紙見返しの版本

左の写真は、『珮川詩鈔』見返しの版本です。文字は鏡文字になっていますので、印刷された状態で読み直すと「嘉永癸丑新刊 珮川詩鈔 濯櫻堂蔵」と陽刻されています。「嘉永癸丑」は1853年、「濯櫻」は草場珮川の「号」の一つです。

さて、この版本が一枚の木から彫り起こされたものとして見ると、幾つか不自然な箇所があります。

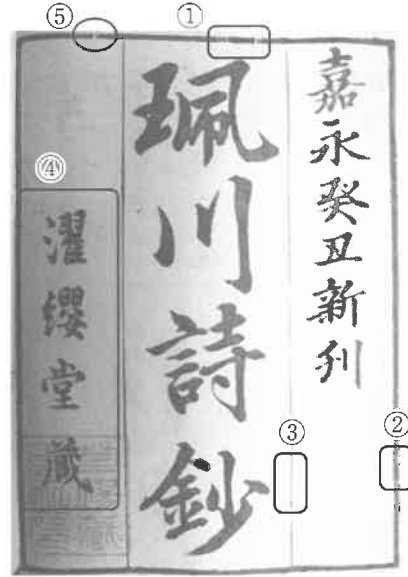


例えば、①②③の部分は彫り残された太い枠線の上に、何か付着し盛り上がりつつあるように見えます。また、④は本来であれば彫りこんだノミの跡だけが見える場所に、長方形で切ったような枠線が見えま

す。これらの部分を、次に版本で確認します。

(二) 館所蔵の版本による版本であることの証明

本文上段に示した版本により印刷された可能性がある左の版本を見ます。この版本をM本とします。



個人蔵M本

版本①②③の部分には、版本①②③の部分に対応する不自然な線が見えます。このことは次のように考えられます。何らかの原因で版本の枠線が傷つけられて線が切れたため、補修を施した線で、その補修が補修痕として版本に印刷されたものです。逆に版本⑤の部分には切れた線が見えますが、これを版本⑤で確認すると、それに相当する部分に凹ができていて、線が切れていることが分かります。

一方、版本④の部分には版本④に相当するような線は見えませんが、これは、版本④の切り込み線は、「濯櫻堂蔵」の文字面より低いため、版本には印刷されなかったことに因ります。

さて、印刷された文字の特徴は、版本に彫られた文字の特徴に一致しています。また、版本の補修が版本の補修痕として現れ、これも一致しています。従って、上段に示した版本により、中段に示した版

本が印刷されたことと証明できたこととなります。

ところで、前回、館蔵の版本は草場建彦氏から寄贈されたことと紹介しましたが、「濯櫻」という珮川の号が記されていることから、「濯櫻堂蔵」と銘が入ったこの版本は、草場珮川没後に、草場家に所縁のある方々が版權を取得(求版きゅうはん)し、刊行したものと考えられます。

(三) 版本Mと版本Kの表紙見返しの比較

左に示す写真は、(二)でみた表紙裏とは異なる版本で、これをK本と呼ぶことにします。



個人蔵K本

(二)で見た版本の補修①②③が、K本の対応する部分にも見られます。文字の特徴も一致しています。しかし、M本⑤にある切れた線は肉眼では見えませんが、これは、M本とK本では印刷された時期が異なる可能性を示しており、K本を印刷する段階では版本に凹がなかったのが、M本を印刷する段階で版本に凹ができていた可能性があります。

続いて、K本の④を見ると、M本とは全く異なる文字があることに気づきます。すなわち「書林 文榮堂 墨香居」と記載されています。墨香居は、この時期の板元である藤屋禹三郎(大阪心斎橋)として

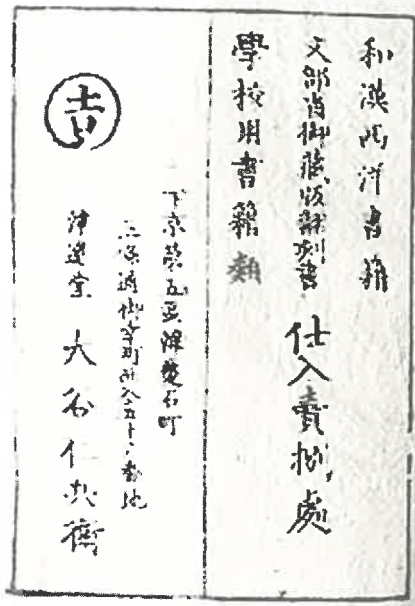
他の書籍に記録があり、版本Kの裏表紙見返しにも板元として記載されています。

改めて、(一)で見た版木を見直すと、これは新刊発行後に板元が変更され、「書林」を浅く削り、「林文榮堂墨香居」の部分深く掘り込み、新たに「濯櫻堂蔵」の文字を刻んだ木片をうまく埋め込んだ(埋木うめき)ことが分かります。従って、版本Mは、版本Kが出版された後に、再出版された版本であることが分かります(後述)。

以上のように、版本Mと版本Kの表紙見返しは、出版時期は異なるものの、同じ版木をもとにして印刷されたと版本であると判断できます。

(四)『珮川詩鈔』M本が印刷された年代

『珮川詩鈔』M本は巻一〜巻四からなっています。その巻四の裏表紙見返しに左の写真です。



次のような文字が記載されています。

「和漢西洋書籍 文部省御蔵版刻書 學校用書籍類」「仕入賣捌處」(吉) 下京第五區辨慶石町 三條通御幸町西入五十六番地 津逮堂 大谷仁兵衛。この奥付や表紙等には刊行年が記載されていませんので、奥付の文字などから印刷された年代を推定し

てみます。

①「文部省」

新刊は幕末の嘉永六癸丑歳でしたが、文部省などという文字を見ると、これは明治時代の刊行になるはずです。文部省は、太陰曆明治4年7月18日(太陽曆1871年9月2日)に「大学ヲ廢シ文部省ヲ置ク」(明治4年7月18日太政官布告)により設置された省です。そうすると、M本は明治四(1871)年秋季以降に刊行されたこととなります。

②「津逮堂 大谷仁兵衛」

津逮堂の名称は、江戸期の18世紀末刊『六如菴詩鈔』に「津逮堂大谷仁兵衛」「大谷津逮堂藏版」とあります。(大谷仁兵衛の名称は延宝四(1676)年刊『鉢かづき』まで遡ることができます)。その後、幕末に至るまで(大谷)津逮堂(藏)(吉野家)大谷仁兵衛の名称が散見されます。これらの名称は明治期にも引き継がれ、明治十年十一月刊行『懷寶日用鑑』に「津逮堂藏梓」「大谷仁兵衛」の文字が見えます。因みに大谷仁兵衛の名は、大谷家を継いだ人物により二次大戦後まで継承されます。

③「吉」

○に吉(口の上は土)の○は、よく見ると「の」と見え、吉野家の略号だと考えられます。これと類似した裏表紙見返しを持つものがあります。明治七年三月刻成と記された『民権大意』で、京都書林津逮堂 三條通御幸町角 (吉)大谷仁兵衛版となっています。但し、吉の口の上は土となっています。また、住所の最後の一字「角」もM本とは異なっています。

④「下京第五區辨慶石町 三條通御幸町西入 五十六番地」

これは津逮堂の住所ですが、これに近い住所を表記した版本に雨森精翁著の『日本政記節記』があります。全四冊あり、その第一冊自壹卷至三卷の奥付に「明治十年三月三日出版々権御願 同年三月十四日版權免許 同年九月刻成發兌」出版人 大谷仁兵衛 下京第五區弁慶石町五十六番地」とあります(町名はM本の「辨」と異なり「弁」)。

※上記『懷寶日用鑑』も同じ住所です。

ところで、同本の自十三卷至十六卷の奥付には前記同様の住所記載があるにもかかわらず、更に、M本の奥付と全く同じ奥付(吉)口の上も土)が付加されている別の版本があることが分かりました。この第四冊は、明治十年九月以降に求版し再発行された可能性が極めて高いと考えられます。

更に、『日本政記節記』の表紙は紗綾形(さやがた)文で飾られ、『珮川詩鈔』M本と同様です。←



また、京都は明治十二年四月に上京区下京区を発足しており、下京という住所表記は、それ以前の時期になります。

以上①〜④のことから、『珮川詩鈔』M本が印刷された年代は、上限は明治七年春季、下限は明治十二年春季、『日本政記節記』自十三卷至十六卷の奥付の事例等を勘案すると、明治十(1877)年秋季〜明治十二(1879)年春季と推定されます。

(続く)

多久家文書  
『水江事略』(翻刻文) 紹介 6

水江事略卷之四

長信公譜之三 元龜元年庚午ヨリ

天正四年丙子ニ至ル

元龜元年庚午 長信公御年三十三

童造寺ト大友和平破ル

直茂公譜 豊府ニ遣ハシ置カレタル秀嶋四郎右衛門忍  
テ肥前ニ歸ル去年夏大友ト和平ノ事ハ毛利ノ加勢ヲ待  
タレ時ヲ延サン為ニ謀斗ニテ暫時ノ御和睦ナリ

三月大友宗麟分國ノ兵ヲ催シ再ヒ高良山ニ出張ス龍造寺  
ヲ征伐センカ為ナリ戸次吉弘臼杵ノ三老臣先陣タリ各  
大軍ヲ率ヒテ東口ニ押寄ル志カ賀田原一万田筑後肥後  
ノ兵ヲ率ヒテ東南ノ口ニ寄ル大友八郎親貞ハ豊後筑前  
ノ兵ニ將トシテ北ノ方河上ノ口ニ陣ス西ハ有馬義純ヲ大  
將ニテ其一屬藤津高木杵嶋松浦ノ郡士大友カ催促ニ應  
シ各多兵ヲ以テ砥川佐留志丹坂牛尾ノ山野ニ充テ満ツ  
テ陣ヲ取ル三方ノ軍兵都合八万餘騎トソ聞ヘケリ佐嘉  
ニハ隆信公ヲ初メトシテ城中ノ兵僅ニ三千ニ過キス長  
信公ニモ城中ニ在テ隆公ヲ御助ケ死ヲ決シテ御籠城ア  
リ

四月隆公巨勢若宮村ニテ豊軍ト御接戰御勝利アリ  
直茂公譜 四月二十二日城兵東ノ口ヘ打出巨勢若宮ニ  
陣取タル敵筑後ノ田尻伯耆守親種酒見六郎城嶋ノ一族  
ト防戦シ城兵利ヲフ

五月隆公高尾ニテ敵ニ當リ御勝利有リ首級ヲ獲ラル後浮  
盃橋津巨勢犬童ノ所々ニ御合戦有リ互ニ勝敗有テイツ  
果ベシトモ見ヘサリケリ

家系事績 大友宗麟再ヒ高尾山ニ陣シ先鋒戸次道雪高  
橋鑑盛阿祢村ニ屯ス臼杵鑑速春日ニ陣ス國中皆彼カ催  
促ニ應シ佐嘉城ヲ圍ム城中ニハ素ヨリ其意ヲ得テ妻子  
ヲ退ケ殊死ヲ決ス隆信ハ道雪ニ組ミ鑑兼ハ鑑盛ニ組ミ  
信昌ハ鑑速ニ組マハ勝負ヲ一戦ニ極メント思ヒ設タル  
有様ナリ豊軍境原ニ進ム先駈高尾ニ近ツク時隆信鑑兼  
信昌城ヲ出テ切懸リ長信信周ハ城ヲ守テ警衛ス公士卒  
ニ下知シテ云寡兵衆ヲ破ルニ術ハ鉄丸ノ坂ヲ下ルカ如  
シ直ニ大將ノ備ヘニ向ヒ邊傍ヲ見ルナカレ分捕ヲ好ム  
ナカレ味方ヲ助ケテ群ヲ離ル、ナカレ初ヨリ弓矢ヲ用  
ヒス鎗刀列ヲナシ向フ敵ヲ切捨ヒス豊軍雲霞ノ如シト  
イヘドモ防留ル事能ハス退テ本陣ヲ固ム

鎮西志 蓮池ノ城ニハ龍造寺和泉守長信(此時兵庫頭)  
龍造寺上総介家晴城番トシテ軍兵二千許又大友ヲ防拆  
スト  
小田鎮光ハ大友ニ一味シ多久ヨリ出陣シ神代長良ハ北手  
ノ按内者ト成リ八戸高木江上横岳馬場筑紫以下佐嘉神  
埼等郡士各豊後ニ味方シ龍造寺ニ押寄スル  
八月寄手八万騎餘日ヲ定メ龍造寺ヲ攻破ラント其用意專  
ナリ當家ノ滅亡日ヲ過サシトソ見ヘニケル

鍋嶋飛驒守信昌公寄手ノ陣々ヲ物見シ得ト其強弱ヲ量リ  
今山ノ陣ニ夜懸セント請ハレシカ共城中野心ノ輩有テ  
衆議區々ニシテ定マラス爰ニ於テ長信公進ミ出テ仰ケ  
ルハ我モ信昌ト同意セリ只速ニ進発スベシ今斯ク大軍

ニ囲マレナカラ悠々トシテ日ヲ送ラハ一族悉ク敵ノ虜  
ト成ラン信昌イサヤ發行シヘシト仰ラレシカ共兎角ニ  
軍議果タサバリケリ此時母公(慶聞)座中ニ立出テ仰

ラル、ハ我女ノ身ニシテ軍ニ事ハ知ラセレ共義ヲ守リ  
節ニ死セン事ヤハカ男子ニ劣タンヤ先刻ヨリ御邊等ノ  
詮議ヲ聞クニ區々ニシテ一決セス幸信昌長信所存アリ  
何ソ是ヲ行ハサル所詮運ヲ天ニ任セ速カニ事ヲ行ヘソ  
ト有シカハ(御母公衆座ニ御出仰ラレカルハ今城中中  
ノ者共悉ク臆病神ニヒカレテ猫ノ前ノ鼠ニ異ナラス所  
詮左衛門太夫カ申スニ任セ夜討シテ見ルヘシ利運ナク  
ハ夫迄ヨト席ヲ叩テ仰ラレシ程ニ隆公モ御同意ニテ夜  
討可然ニ相極ル)其時隆公大ニ母公ノ言葉ヲ悟リ則チ  
衆ニ向テ仰ケルハ我モ最前ヨリ左社存スル所ナリ去ナ  
カラ衆人ノ議スル所決セサル故差扣ヘタリ弓矢神モ照  
覽アレ隆信ニ於テハ今宵ノ一戦ニ死ヲ決スルト刀ヲ  
抜テ前ナル疊ヲソ切ラレケリ信昌公大ニ悦テ曰我今夜  
ノ戦ヒ大將ノ首ヲ提ケズンハ生テ再ヒ當城ニ歸ルヘカ  
ラスト同ク疊ヲ切テ誓フ我公悠然トシテ御座ヲ立直ニ  
物具シテ立出ラル時ニ八月十九日ノ黄昏ニソ有ケル隆  
公則御進発有テ敵ノ追手於保原ニ向ハル長信公先陣タ  
リ信昌公ハ今山ヲ廻テ搦手ニ向ハル二十日ノ曙難ナク  
敵ノ背ニ攀登リ俄ニ鬨聲ヲ發シ大友カ本陣ニ烈火ノ如  
ク突懸ル忽チ敵陣ヲ切破リ大友八郎ヲ討取(成松遠江其  
首ヲ得タリ)其他首ヲ獲ル千餘級本陣一戦ニ破レシカハ

處々ノ豊軍散々ニ敗走ス追手ノ軍モ又大ニ勝利有テニ  
公ノ兵卒討取敵若干ナリ追手搦手ヒトシク凱歌ヲ發ス  
鴨打陸奥守豊軍ノ物頭林式部多輔ヲ討取(式部多輔ハ鴨



打ノ家人孤原大膳組打ト有リ肥後ノ住人城の親冬ヲ生捕  
 尤其戰功ヲ賞セラル

我公ノ家臣河原佐馬允先手ニ在テ烈敷戰ヒ逃ル敵ヲ追  
 テ山中ニ入八戸宗暘カ跣足ニテ逃ル所ニハシタナク行  
 逢ヒ其俣刀ヲ合ス宗暘カ從者立塞テ討死ス宗暘ハ深手  
 ヲ負ヒ(或ハ内野山トモ法名心翁宗安) 杠山ニ到テ死ス

直茂公譜 宗暘主從四五人ニテ山内ニ引ケルヲ川原  
 忠右衛門追懸ケ上帶ノ迦レヲ切付ル川原モ左ノ手ヲ  
 切ラレテ引退ク宗暘ハ杠山迄退キ其手痛ミ終ニ死ス

鎮西志 金立山權現本地堂ノ扉旧筆ノ落書アリ其交名  
 文字既ニ消テ僅ニ殘ル寫シ載テ 云永祿十三年庚午

仲秋十七日金立山雲上宇寺初テ一見ノ人數豊國ノ住  
 人大將ニハ大友八郎親貞生年三拾三歳籠衆出家一人  
 俗十人平井宮内少輔鑑貞惠良左京亮鎮生……等也

神代兵庫頭長良河上口ノ案内者タリ以上

□書 長瀬村天神社家ノ記ニ云豊後ノ大將大友八郎殿  
 來國之時陣ヲ移シテ長瀬ノ宮ニ到ル 下略

神代長良ハ北山ニ卻キ小田鎮光ハ東目ニ赴ク其他豊後衆  
 ノ今山河上邊ニ陣セシモニ皆散々ニ敗走ス隆公軍ヲ収メ  
 テ龍造寺ニ歸リ玉フ城中ニハ一族老若出迎ヘテ大ニ今山  
 ノ勝軍ヲ悦フ事限リナシ去ナカラ隆公ハサシテ御悦ヒノ  
 御氣色モナク愀然トシテ仰ケルハ我多久城ノ存没如何ア  
 ラント甚心懸レリ子ナリ娘ナリ生存ヘテ有ランニハ何  
 卒取返サント思フナリト仰ケレハ鍋嶋信昌笑テ曰其義ナ  
 ラハ某早速彼地ニ馳向ヒ御共シテ罷歸ラン御氣遣ヒ有ハ  
 カラス隆公ノ玉ハク我御邊ニ心ナキニ非ス去ナガラ昨夜  
 ヨリノ苦勞太義誠ニ言語ニ絶タリマダ鎧ヲモ脱ス食ヲモ

給サルニ何共口ヲ開キ難カリシト仰ラル時ニ我公信昌ノ  
 側ニ差ヨリ何か耳語テ立玉フ信昌ハ隆公ノ御墓所ニ到リ

立ナカラ湯濱ヲ召サレ其俣馬ヲ發シテ西ニ馳セラル士卒  
 ノ附從フ者二百余人皆屈竟ノ輩ナリ我公ハ逞兵三百余人  
 ヲ率ヒテ洩々聲シテ馳向フ龍造寺下総守小河武藏守鴨打

陸奥守窪田西持院古賀弥藤次ノ輩追々後陣ニ馳加ハル其  
 勢都合一千餘ナリ丹坂ニ陣セシ敵兵共此勢ヒニ怖レ跡ヲ  
 モ見スシテ逃失セケリ是ニ依テ道筋障ル事ナク先陣既ニ

別府ニ到ル兩將先相浦ヲ誘フ右衛門允早速領掌ス且告テ  
 云鎮光最前我妻子ヲ城中ニ取入レ人質トシテ出陣セリ去

ナカラ某龍家ニ對シ妻子ヲ捨殺シニセン事イトヤスシト  
 テ其儘按内者ト成テ先陣ス(右衛門カ嫡子初法師質ト成テ城内  
 ニ在リ後左衛門尉ト云) 我公先佐伯馬助ヲ遣シ山内ノ村長

小侍土橋津留佐古安童前田山犬原樋口倉富米満等ヲ誘フ  
 彼等ハ山内ノ咍十人衆ト称スルモノナリ初鎮光ニ属シテ

各妻子ヲ人質トシテ城内ニ入置シカ共我公ノ命ニ依テ一  
 議ニモ及ハス相浦ト共ニ先陣ニ馳ハル我兵既ニ中山越ヲ  
 經テ多久城ニ到ル城方ニハ城代江口右馬助内田治部太輔  
 及横山大隈蘭田山田以下百餘人外郭ヲ捨テ城中ニ楯籠ル  
 彼等ハ皆屈竟ノ輩ナリ信昌公則鍋嶋淡路守公文相模守ヲ  
 使トシテ城中ニ遣シ申入ラルハ鎮光既ニ豊軍ニ加ハリ  
 蓮池ニ入城ス然レハ御邊等空敷主ナキ城ヲ守ルナリ婦人  
 ト若君ヲ違義ナク此方ニ渡サレナハ城中ノ人々ニ於テハ  
 一命ヲ助クヘシト云々江口内田カ返答ニハ主人ノ為ニ城  
 ヲ守リ其妻子ヲムザクト人ニ渡ス理アランヤト中々聞入  
 ス淡路相模ハ寄手ニ歸リシカジカノ由ヲ申スサラハ城ヲ  
 責潰スヘシト諸勢既ニ城ヲ困ム兩將ハ追手西ノ口ニ相向

ハル我公ノ一列殊ニ先登タリ下総守武藏守龍造寺伊賀守  
 以下皆此手ニ属ス信昌城ノ体ヲ見テ云城ノ背龜ノ甲險岨

ニシテ責難キ所ト見ヘタリ敵是ヲ頼ンテ守兵定テ少カラ  
 ン其不意ヲ討タハ利ヲ得ン事必定ナリ誰カアル彼手ニ向  
 フヘシ時ニ鴨打陸奥守進テ曰某是にニ向ハシ一昨夜今山

ノ戰ヒ家人多ク討死シ或ハ疵ヲ被リ當時至テ微勢ナリ去  
 ナカラ我既ニ一命ヲ隆公ニ捧ケタリカ、ル難義ノ場ニ向

ハスンハ争デカ武士ノ志ヲ達セン早速馳向ヒ申ヘシト擲  
 手ニ廻テ難ナク龜ノ甲ニ押登ル附從フ家臣ノ輩疵ヲ被ル

者多シ既ニシテ追手擲手同時ニ関ヲ合セヒシビシト攻寄  
 セ寸歩モ退クモノナシ時ニ長公ノ士成富與六左衛門ト云

者衆兵ニ先立ツカ 漕ヲ渡リ堀ヲ越ヘ大手ノ門ニ馳入り内ヨリ  
 門ノ貫木ヲ引抜キ扉ヲ開ヒテ味方ヲ引入タリ城兵堀ノ谷

ニ防ク信昌討テ是ヲ破ル與六左衛門勇ヲ振テ敵ニ當ル城  
 兵悚ラス本丸ニ引入ル兩將ノ先鋒址ルヲ追ヒ追テ敵ヲ討  
 コト數多ナリ城内ヨリモ石弓ヲ放チ鳥銃ヲ發シ防戰尤烈  
 シ抑梶峯ノ城タル山險岨ニシテ湏幾重ト云事ヲシラス曲  
 折ナル細道繞リ廻テ登ル事十餘町城兵今ヲ最期ト防キ戰  
 フニゾ寄手疵ヲ被ルモノ數ヲシラス(相浦カ臣中原新右  
 衛門討死) 城士田中帶刀以下屈竟ノ者多ク堤ノ谷ニテ討  
 死ス信昌ハ堀ノ下ナル切岸ニ附キ櫻ノ立木ヲ楯ニ取リ敵  
 ノ射出ス矢ヲ避ケ透アラハ乘入ラント伺ハレシ所ニ成富  
 與六左衛門眼ノ前ニテ駈出ル敵二人ヲ突伏セ鎗ヲ突折タ  
 リ信昌公ハ成富カ烈敷働キ御覽有テ目覺シキ御邊方働キ  
 何者ナルゾト御尋アリケレバ長信ノ家臣成富與六左衛門  
 ニテ候其時信昌公近來自陸ニ持セ玉フ所ノ鎗ヲ取り是ニ  
 テセヨト手自ラ與ヘ玉フ擲手ニハ鴨打カ一列龜ノ甲ニ攻



# 梶峰城の歴史、後世に

## 多久市民有志が登山道保全

【多久市】

鎌倉時代に多久市多久町の梶峰山に築かれた梶峰城跡(標高約200㍎)

を伝え残そうと、地元有志が城跡に通じる登山道の保全に励んでいる。佐賀藩多久領の領祖・龍造寺長信が1570(元亀元)年に入城し、町の礎を築いてから今年で450年。15日には、長信ゆかりの神社で記念の神事を開く。

### 15日、多久神社で記念神事

梶峰城は1193(建久)を受けて取り壊された。現4年、鎌倉幕府の御家人 在は建物を支える土塁や、戦国時代以降は再三、城主 堀、石垣などの遺構が残る。戦国時代以降は再三、城主 龍造寺長信は、初代多久が入替わり、1615(元禄)領主の多久安順の父。50(和元)年の「二国一城令」0人余りの兵を率いて城に



梶峰城跡の保全に取り組む住民有志。15日には記念の神事も開く—多久市多久町の多久神社



梶峰城跡に通じる登山道で、倒木を取り除く住民有志—多久市多久町

で遊び、地域に愛着がある人たちが集まった。城跡を守ってきた先輩たちの歴史と一緒に次の世代に受け継いでいきたい」と話(谷口大輔)

入り、その家臣たちが城下町を築いたとされる。こうした歴史を踏まえ、多久町の区長や老人クラブの役員ら有志6人が発起人になって「多久城下町に学ぶ会」が発足。住民たちも加わって登山道や山頂の倒木を取り除き、目印のほり旗も自費で30本作った。神事は長信が入城したと



▲梶峰城 遠景



▲多久神社(旧梶峰神社)



▲来賓祝辞(多久市長)



▲発起人代表の挨拶



たぐずしよのかみしげとみ  
**多久圖書頭茂富** (1585~1659)

**慶聚山 龍雲寺**

龍雲寺(佐賀市八戸)は、室町時代にこの地域を治めていた八戸氏の館跡に、天文元年(1532)大用宗俊和尚により開山された曹洞宗の禅寺で、藩政時代は佐賀藩の「曹洞十二か寺」の一つに数えられた名刹である。



長信公譜之一」に、「天文十五年秋八月水江圓藏院豪覺法印ノ石塔夜ナ夜ナ火ヲ発ス諸人大ニ是ヲ怪シム水江ヨリ諸宗ノ高僧ヲ請シテ是ヲ消セトモ止マヌ爰ニ龍雲寺大用和尚トテ大徳ノ知識アリ命ニ依テ来リ塔火ニ向テ挨拶シテ曰種々ノ幻化生乎覚心即今幻盡覚盡時如何又自ラ代テ曰如薪盡火滅ト火焰則チ消ユ時ニ侍者柱杖ヲ扱テ曰焼火杖亦無用矣是ヨリ大用和尚ノ法徳大ニ顕レ水江ノ一家曹洞宗ヲ歸衣シ同派寺院繁昌セシハ此時ヨリノ事ナリトソ豪覺法印ハ家純公ノ御次男我公ノ叔父ナリ寶琳院ノ住職ニシテ圓藏院ハ其遷化ノ地ナリ」圓藏院は、水ヶ江龍造寺家

純の別館であった。家純の三男豪覺が療養していたが病死したため此の地に葬られた。天文十四年(1545)正月、馬場頼周によって川上や祇園原で討たれた家純、家門、純家、周家、頼純、家泰、そして豪覺の供養のために建てられた。当初は天台宗の寺院だった。

翌十五年(1546)八月、豪覺の墓塔から毎夜怪しい火の玉が燃え出していると噂になった。人々は騙し討ちにされた龍造寺一門の恨みが成仏出来ずにいると恐れ、諸宗の高僧にお願いしたが効果がなかった。ところが、大用和尚の法徳により消え去った。この一件により、水江の一家(水江龍造寺)は曹洞宗に帰依し、同派の寺院興隆のきっかけになったと記されている。

**龍雲寺の多久家墓地**

本堂の西側の奥に多久家墓地がある。整然と二列に並んだ石塔の奥右側から、

①天叟浄祐居士(多久初代領主多久安順)



②月照妙圓大姉(安順の妻、徳寿院)



の五輪の塔が並んで、それぞれ法名と没年が印刻されているが摩耗して読み取れない。

徳寿院妙圓の左側に慶長十二の文字を微かに見ることができ、安順は寛永十八年に、徳寿院は萬治三年に亡くなっているので、ここに刻されている慶長十二年銘は、没年ではない。

この二基の石塔は、生前供養塔(逆修碑)と推定

することが出来る。

慶長十三年(1608)家久公が駿府の御城普請の時に、龍造寺與兵衛尉家久を多久長門守家久と改められ、慶長十七年(1612)徳川家康の家

を憚り安順と称するようになる。



③久山隆永居士(多久圖書頭茂富)

萬治二己亥六月二十六日

茂富は、塚崎(武雄)領主後藤貴明の長男家生と、多久の領祖龍造寺長信の長女真光院の長男として天正十三年(1585)に生まれ、天正十七年(1589)五歳の時に家久公の養嫡子となる。

慶長十三年(1608)圖書頭と称している。元和七年(1621)部屋住料として、納所、花祭、西ヶ坂、西明寺、西山、皆木、波佐間分の七ヶ村を与えられている。

元和九年(1623)十二月二十三日、父後藤家生が別府の新所にて卒す、六十一歳。法名は月峰浄葩。

寛永五年戊辰(1628)二月朔日、茂富公我公(安順)の御心に叶わざる故有りて御離縁成さる。

茂富公の御子、伊平太(今年二十一)君を以て御世嗣とせらる、美作守茂辰公の御事なり、茂富公は益田村に蟄居せられ、増田圖書と称せらる。後、太守(鍋嶋勝茂)の御赦免を蒙られ、鍋嶋の氏を賜り、米千俵を扶持せられ、御懇情を加えらる。



後には藤津郡鳥坂村に住居あり。茂富公に一男三女有り。長女は有田勘解由孝記の室（久光院）。二女鍋島淡路茂旨の室（妙芳院）。三は茂辰公。四女は早世（土千代）。母は太田生左工門茂連の女（梅室夫人）。妾腹三人。一女は多久右京亮の室。二女は多久右馬助に嫁す（本佑安玄の母。三男は小田蔵人長昌と云う。茂富公の遺跡を嗣がれしが共、不幸にして早世なり。

萬治二年己亥（1659）六月廿六日、茂富公御逝去。御法名久山隆水居士、龍雲寺に葬る。

④梅室妙林大姉（茂富の妻）

元和七辛酉十二月六日

鍋島直茂の妻・陽泰院は、天文十年（1541）飯盛城主・石井平部少輔常延の二女として生まれた。幼名は彦鶴姫。龍造寺家の家老納富信澄に嫁ぐが、永祿九年（1566）に、夫・納富信澄が討死してしまったので、娘・月昌を連れて実家の石井家に戻る。永祿十二年（1569）に、鍋島直茂と再婚。

月昌は成長して太田生左衛門茂連に嫁ぐ。その子が梅室夫人である。

元和七年十二月六日、水江西の館にて卒す。法名は梅室妙林、八戸の龍雲寺に葬る。

茂富公殉死者の供養塔

茂富公と梅室妙林の墓塔の前列、斜め前に大きめの石塔が建っている。碑の前面に印刻してある文面は風化して、やっと判読出来る程度であるが八名の名前が連記されている。「水江事略卷之八」に記録

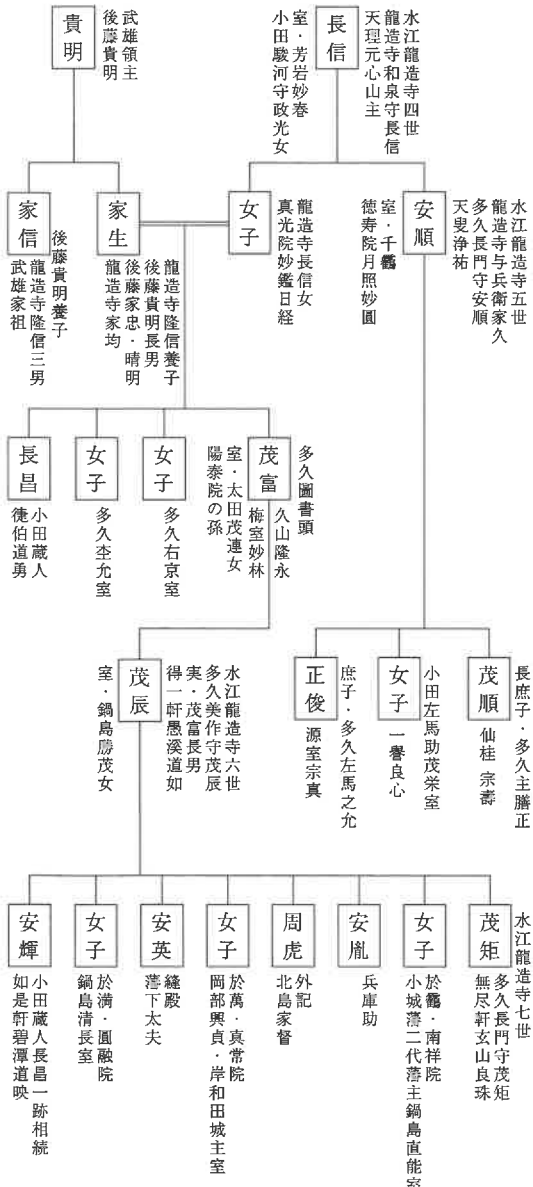


されている茂富公に殉死した者の供養塔である。

「萬治二年六月二十六日、圖書頭茂富公、藤津鳥坂に於いて御逝去。御法名・久山隆水居士、龍雲寺に葬る。殉死する者、大坪卜也、武富勘兵衛、中村太左工門、古澤清左工門、江副又左工門、古澤清兵衛、坪上源五左工門、久保千左工門妻、都て八人なり。

千左衛門妻、殉死の由縁を尋るに、夫・千左工門病氣にて先達て相果てしが臨終の時、妻に向かつて云う。我、深く茂富公の御恩を蒙り兼ねて追腹を約し奉りしに不幸にして、只今、主人に先立候事、黄泉の障り也と申せしかは、妻はニッコリと打笑み、御心安かれ、私茂富公のいまわの時迄ながらえてだに候はば、夫の御代わりとなり、御本懐を遂げ申べ

多久茂富の略系図



しと心よく肯ひしかば、千左工門悦びて死す。公（多久茂辰公）千左工門か妻の追腹せんとする由を聞伝えられ、御使を以て、思い留り候へと頻りに仰聞られ候へ共、夫・千左工門が臨終の時、堅く云かわし置しに、ながらえて主人の御専途に逢うこそ幸いな

武雄領主の嫡孫として生まれ、多久領主の養嫡子と成りながらも離縁され悲運な生涯を終えた茂富公。主君と共に黄泉の国に旅立った家臣たち。夫との約束を守るために殉死した一人の女性。供養塔の前にたたずみ手を合せた。（服部政昭）

【参考文献】

- 『水江事略』卷之二、卷之八（多久市郷土資料館蔵）
- 『水江系譜』（多久市郷土資料館蔵）
- 『舊多久邑人物小誌』（舊多久邑史談會、一九三一年）
- 『多久市史』人物編（多久市、二〇〇八年）
- 『佐賀市史・近世編』（佐賀市、一九七七）

# 肥前国多久邑八景詩紹介(其の八)

## 南山積翠

積翠重々雲霞堆

積翠重重トシテ雲霞堆シ

維南樹色勢崖鬼

維南ノ樹色 勢崖鬼

採芝遠入山深処

芝ヲ採リ遠ク山深キ処ニ入ル

試問商翁来不来

試ミニ問フ 商翁来ルヤ来ラザルヤ

諸官快堂 林信允士僖甫

## 南山積翠

西寒紅霞落

西寒ニ紅霞落チ

南山翠色開

南山ニ翠色開ク

臨風何限思

風ニ臨メバ何ゾ思ヒヲ限ラン

盃酒此徘徊

盃酒此コニ徘徊ス

経筵講官 林信智艸

## 多久聖廟 秋季積菜

日時 令和2年10月25日(日) 場所 多久聖廟

- ① 執事・伶人 入場 10時～10時20分(聖廟参道)
- ② 献官・祭官 入場 10時20分～10時30分(聖廟参道)
- ③ 積菜(せきさい) 10時30分～11時(聖廟内)

### 『略祭』についてのお知らせ

多久聖廟積菜(佐賀県重要無形民俗文化財)

元禄十四年(1701) 季秋朔初辛卯の日に、京師・村楊齋に依頼していた新しい孔子像が学寮(鶴山書院)に遷座し、積菜行香が執り行われました。そして、宝永五年(1708) 聖廟恭安殿が創建されて以来、春秋二回の儀式・積菜が連綿として恭安殿に於いて続けられてきています。

江戸時代には、領主が献官となり、家老や郷校の教授・教諭たちが祭官となり、孔子・顔子・曾子・子思子・孟子の順に銀杏(秋は棗)・栗・雉肉(秋は鮒)・筍・芹・ご飯・餅・甘酒の八種類の供物が捧げられています。(現在は、多久市長が献官となり、祭官や執事は、市議会議長、熟練者、教育長、学校長が務めています。)

今回、新型コロナウイルスの感染拡大防止のために緊急事態宣言が発出されたのを受け、三密(密閉空間、密集空間、密接空間)を避け、皆様の健康と安全を最優先し、過去の慣例に従って略祭(雅楽の演奏を中止して「御供物」だけを行う儀式)にて実施する事になりました。

『略祭』は、享和二年(1802)二月、佐賀城内多久屋敷焼失の時。文化元年(1804)二月、中の館屋敷焼失。四月、御在所役所焼失。九月、御屋敷焼失の時。天保四年(1833)十二月の学寮火災の為に翌年二月の積菜が略祭にて行われた記録が残っています。

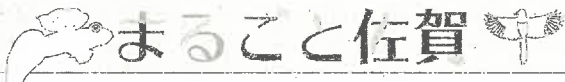
また、藩主・領主の喪の場合にも略祭で行われています。

来訪・来信・雑録

- 4月7日 令和2年度春季祭菜委員会
- 4月14日 春季祭菜総練習
- 4月18日 令和2年度春季祭菜
- 5月12日 公益財団法人孔子の里理事会
- 5月27日 公益財団法人孔子の里評議員会
- 6月6日 鶴山塾「中国古典の扉①」
- (孔子の里理事 武田耕一)
- 6月6日 有田町同朋保育園、多久聖廟境内で論語の素読
- 6月13日 鶴山塾「はじめて学ぶ古文書①」
- (多久市郷土資料館学芸員 山口佐和子)
- 6月20日 鶴山塾「水江事略をよむ⑩」
- (孔子の里常務理事 服部政昭)
- 6月27日 鶴山塾「佐賀城の歴史・竜造寺氏の佐賀城から鍋島氏の佐賀城へ」
- (佐賀市教育委員会文化振興課文化財一係主任 大平直子)
- 7月4日 鶴山塾「中国古典の扉②」
- (孔子の里理事 武田耕一)
- 7月11日 鶴山塾「はじめて学ぶ古文書②」
- (多久市郷土資料館学芸員 山口佐和子)
- 7月18日 鶴山塾「再発見！龍造寺天満宮縁起絵」
- (佐賀県立博物館前副館長 福井尚寿)
- 7月25日 鶴山塾「歴史に埋もれた名匠・徳永雨脚」
- (佐賀大学教授 中尾友香梨)
- 8月1日 公益財団法人孔子の里評議員選定委員会
- 鶴山塾「中国古典の扉③」
- (孔子の里理事 武田耕一)
- 8月8日 鶴山塾「はじめて学ぶ古文書③」
- (多久市郷土資料館学芸員 山口佐和子)
- 8月22日 鶴山塾「石井鶴山と敷島山」
- (熊本大学教授 中尾健一郎)
- 8月29日 鶴山塾「多久の歴史的建造物の保存と活用」
- (株式会社アルセット建築研究所取締役 佐賀所長 清水耕一郎)
- 8月31日 令和2年度秋季祭菜委員会
- 9月5日 鶴山塾「中国古典の扉④」
- 9月12日 鶴山塾「はじめて学ぶ古文書④」
- (多久市郷土資料館学芸員 山口佐和子)
- 9月15日 水江龍造寺氏、梶峰城入城450年記念神事(多久神社)
- 9月26日 鶴山塾「水江事略をよむ⑪」
- (孔子の里常務理事 服部政昭)

IEEE (アイトリプリー) 学会2020 表彰おめでとうございます

佐賀新聞 2020年(令和2年)8月2日(日曜日) 地域の話 18



# 松瀬さん(多久市出身)米学会が表彰

電気自動車の進歩に寄与

東京 多久市出身で明治大学名誉教授(工学博士)の松瀬貢規さん(76)が、米国に本部を置く電子・電気工学分野の学会「IEEE」で、表彰を受けた。1980年代に研究したモーターの電気制御が、現代の電気自動車など輸送機や工業機械の進歩に寄与したと評価された。



IEEEの表彰を受けた多久市出身の松瀬貢規 明治大名誉教授＝東京都内

松瀬さんは多久市出身で佐賀高1明治大卒。モーター駆動の速度を物理的な計測ではなく、電氣的に制御する研究を進め、論文などに発表した。精密な電気制御の実用化は、機械に使う部品の簡素化や軽量化につながる。電気自動車などの輸送機や工業機械などの進歩や産業の発展に貢献した。IEEEは、電力応用分野の先駆者として松

## 80年代に先行研究

瀬さんを表彰した。IEEEは、40万人の会員を持つ世界規模の電気・電子工学の学会。社会の進歩や改革につながる先行研究を毎年表彰している。技術分野は年に1人で、今回は松瀬さんが選ばれた。松瀬さんは「パワーエレクトロニクス分野で最大限の名誉。社会への貢献が評価されありがとうございます」と話す。(山口貴由)

松瀬貢規さん(明治大学名誉教授・工学博士)

多久市北多久町の出身で、多久北部中-佐賀高校-明治大学卒-明治大教授。

パワーエレクトロニクス、ACモーター、リニアモーター制御等の研究で広く知られています。

東原彦舎の神童と言われた志田林三郎博士が明治21年(1888)に設立された電気学会の第96代(2009-2010)会長を務められました。

IEEE表彰は、電気電子分野における優れた業績を残した者に与えられる表彰。



### ● 聖廟の森に棲む動物たち ●



フクロウのヒナ

### 梟(フクロウ)

多久に周年生息する猛禽といえはフクロウである。そのフクロウ、鳴くのは夜だけでなく昼でも鳴くときがある。ホーホー、ごろ助奉公とも、ごろ助ドーコーとも聞きなせる声は昔から親しまれていた。

フクロウは不苦労と書いたり、福籠に通ずるところから縁起の良い鳥としても人の生活の中に生きていた。しかし、その姿を見るのは非常に難しい。

(日本野鳥の会 福田 司)



多久聖廟の森で

多久では、フクロウのことを「ドークウ」と呼ぶ。

ドークウは、「森の賢者」「知恵の神」「森の守り神」として崇められ、大切にされてきた。

以前は聖廟の境内にあった椎の巨木に棲みついていて、雛を孵していたが、その大木も伐採されて、今は姿を見ることが出来なくなってしまった。しかし、時々、森の奥から鳴き声が聞こえてくる。昨年の通学合宿の時にも「ドークウドークウ カネツクドークウ」と鳴く懐かしい声を聴くことができ嬉しくなった。ドークウの棲む森を次世代に残していきたいと強く思う。(服)

### 編集後記

彼岸を過ぎ、暑い夏が終わった。今年は猛暑、台風、疫病と災害連続の年だ。

多久の古文書を読んでいると、人類の歴史は災害との戦いの繰り返しである。

#### 子年の大風

令和2年(2020) 庚子9月6日から7日の早朝にかけて九州西部を通り過ぎた超大型台風10号は幸い大事には至らなかったが、聖廟の森の倒木処理がまだ終わっていない。過去300年間に北部九州を襲った台風の中で最強のものは、文政11年(1828) 戊子の大風、佐賀藩の死者数8850人、負傷者8665人、家屋全壊33490戸、半壊14565戸、大火焼失1173戸。多久でも多くの寺社仏閣が「文政十一年子八月十日暁大暴風ノ時倒ル」と記録に残り、子年には大風が吹くと今に伝えられている。

#### 新型の疫病が蔓延

「はじめて学ぶ古文書」の講座で、講師の山口佐和子先生が、アマビエに関する江戸時代の瓦版を紹介された(図)。

江戸時代の多久でも、疱瘡や疫病の流行に對して、患者との接触を避けるために「商人の御屋形への出入禁止」「役人の出仕停止」「疫病を患えば住居より一定期間の立ち退き」を命じられた記録がみられる。人々は疫病神退散の札を作り門口に張出したり、病気の転除、退散祈禱など神仏に頼っていた。市内各地の集落ごとに「疫神社」「痘瘡神」などの石祠が祀られている。

お中元として知人から熊本県伝統工芸品「洪うちわ」をいただいた。これで疫病を吹き飛ばせたら…。(服)



京都大学所有、京都大学附属図書館収蔵



「肥後国海中え毎夜光物出る 所の役人行見るに づの如し者現す 私海中に住アマビエと中者也 当年より六ヶ年之間 諸国豊作也 併病流行 早々私を写し人々に見せ候得と 申て海中へ入けり」右、写し役人より江戸へ申来る写也。

弘化三年四月中旬